

二〇二四年二月二七日

空に道ありしごとくに白鳥来  
冬ざれの川筋をゆく一両車  
窓に来て辞儀繰り返す尉鶺  
ナナハンでヘルパー来たる寒風裡  
寝仏をくすぐるやうに煤払ふ

二〇二四年二月二六日

年用意気の急くばかりどじ多し  
笹鳴きに歩み止めたる里の道  
テレワーク夫のデスクに蜜柑置く  
数へ日の残りしことを指折りぬ  
大鍋の出番となりておでん煮る  
賀状書く肩肘張らず常の字で

二〇二四年二月二五日

コンテストめきし花屋のシクラメン  
雨やめばどっと人増ゆ街師走

二〇二四年二月二四日

天に星手に燭ともる聖夜かな  
高窓に聖夜の帳下りにけり  
青空に千手を翳す冬芽かな  
白息を手向け我が手を励ましぬ

澄子

むべ

よし女

あひる

山椒

うつぎ

わたる

康子

わたる

風民

みきえ

あひる

うつぎ

むべ

むべ

ぽんこ

風民

二〇二四年二月二三日

障子無く鴨居も無くて煤払い  
のし餅につつきし吾子の指の跡  
白寿なる我を寿ぐ蟹の鍋  
独り居の高所は省く大掃除  
とつぷりと暮れて煌めく大聖樹

二〇二四年二月二二日

冬至柚子一つ賜り奉仕終ふ  
恙無きこの身沈めて冬至風呂  
拳突く波打ち際の寒稽古  
毛糸編む脳は過ぎし日回想し

二〇二四年二月二二日

境内の句碑に翳して照紅葉  
大き柚子ひとつ浮かべてベビーバス  
冬靄に溶け込む漁船明石の門

たか子

愛正

董雨

たか子

せいじ

むべ

澄子

みきお

明日香

はく子

康子

うつぎ

うつぎ

毎日句会みのる選・二〇二四年二月三〇日